

図書館戦争～表現の自由を守り抜くために～

高橋 夢奈（教員養成課程養護教育専攻）

『表現の自由』この言葉を聞いて、何を思い浮かべるだろうか。日常生活において、当たり前のように保証されているこの権利。もしも、表現の自由が認められない世界になってしまったら…。『図書館戦争シリーズ』は、表現の自由が奪われた世界と、自由を取り戻すために立ち上がった人々の物語である。

時は2019年。公序良俗を乱し人権を侵害する表現を取り締まる「メディア良化法」が施行された世界が舞台である。強行的にメディア良化法を運用するメディア良化委員会。合法的に検閲が実行されていく。彼らにより、テレビから、本から、どんどん言葉が狩られていく…。委員会による言論弾圧に唯一対抗できる「図書隊」。本を、そして表現の自由を守るために、一人の女性が図書隊に入隊するところから物語は始まる。

あらずじだけ見ると堅苦しい内容のように思えるが、実際は主人公やその仲間たちの成長と恋愛を主軸に物語が進むため、普段本を読み慣れていない人でも非常に読みやすくなっている。読書が好きな人にとっては、先の展開が見えやすいため、少々単調に思えるかもしれない。が、このシリーズの真髄、作者の意図は、シリーズを読み終えて初めてわかる。主人公とともにドキドキし、ときに涙し、幸せな気持ちで読み終える…。そのときふと、表現の自由が守られてよかったと思えるのだ。

表現の自由は、書籍や新聞、雑誌、テレビ、インターネット…様々なところで保証されている。規制されてしまえば図書館戦争のように、暮らしからどんどん表現が狩られていく。最初はちょっとしたところから規制が始まっていく。別にそのくらいいいだろう、というちょっとした表現の変更。そこから気がつかないレベルでどんどん表現が規制される。気がついた頃には、表現だけでは収まらない、もっと大きな何かを狩られている。作者は何度もこの危険性を訴えていた。自由だからといって、そこに甘んじてはいけない。自由はふとした瞬間、簡単に奪われる。私もこの本を読むまで表現の自由について考えることはなかった。せいぜい公民の授業で聞いたことがあるくらいだ。検閲などは、昔行われていたものくらいにしか考えていなかった。しかし、現在「リアル図書

戦争」と呼ばれるような法律が制定されようとしている。東京都青少年健全育成条例改正案は、その代表例だ。表向きは子供たちを守るためとなっているが、法の拡大解釈で個人の嗜好にまで制限をかけていくことが可能である。現在法律の適用範囲は非実在青少年、すなわち漫画などの創作物に限られている。法律に反対する人の多くはこれらの作品のファンであり、興味のない人にとっては法律が可決しようがしまいが関係ない。しかし、もしも可決してしまえば、それを皮切りにすべての表現にまで法律の適用範囲が拡大する恐れがある。気がついた頃には、漫画が日本から消えてしまっているかもしれない…。図書館戦争に書かれていることはフィクションではない。実際に起こりうることなのだ。

作者はあとがきで、図書館戦争のような世界にはなっていないと述べている。現在日本は先に述べた法律の他、書籍や新聞等では不適切な表現（いわゆる放送禁止用語）の規制が増加、それにより作者の意図が曲げられていることもある。表現の自由は、すでに脅かされているのかも知れない。表現規制に真っ向から立ち向かった作品である図書館戦争シリーズ。このシリーズを読んで、少しでも表現の自由について考えて欲しい。一人一人が表現の自由と向き合い、考えていくことで、作者の願いは達成されるはずだ。

（有川浩著『図書館戦争』シリーズ メディアワークス 2006-2008年）